

まるっこ Marukko

Maruko Central Hospital Public Relations Magazine

feature articles

特集

居



鈴木 彰

【丸子中央病院の理念】 本院は、質の高い医療・介護の提供を通じて地域のしあわせ創りに貢献します。

「ひとの縁を強く感じた一例」

本年度よりデイケアや訪問リハビリテーション部門などでお世話になっております医師の鈴木彰と申します。私は数年前までは大学の消化器外科に所属していたので当院へは当番医や年末年始の当直業務などに来ておりましたが、体を壊したのを機に縁を頼りにこちらで働かせていただくことになりました。20歳時にネフローゼを患いましたが比較的落ち着いた年代だったので大学という特殊な環境下でしたがなんとかやっておりました。しかし数年前に心の病を発症したのをきっかけに病气や怪我におそれ、現在は両眼ともに失明状態で、かつ腎不全のため週3回の血液透析に頼る生活を送っております。それでも大学に在る間に各種専門医の資格や学位の取得ができたのは幸運であり、また良い経験になりました。

今思えば様々な縁やつながりに囲まれておりました。医師として第一外科に入室した際、医局長をなさっていたのが橋倉先生でした。その後研修機関を終えて、医師6年目の時に初めて学会シンポジウムで発表させていただいたのですが、その学会は勝山院長が会長を務められ松本で開催された日本ヘリコプクター学会でした。また学位研究では松澤先生が発見し、採取・分離したヘリコプクター・ハイルマーニという菌を用いて研究させて頂きました。医師としての大切な節目で当院の先生方とつながっていました。

以前よりも患者さんに近い位置にいられるようになった気がします。これまで学んできた栄養管理や全身管理などを生かしつつ、研鑽を積んでできる仕事を増やしていきたいです。そして、誰にも認めてもらえないような一人前の身体障害者になりたいと思います。ご支援、ご指導賜りますようよろしくお願いいたします。



イラスト/森田 宏子

Contents

特集 居
 居場所になる映画館
 「うえだ子どもシネマクラブ」

トピックス

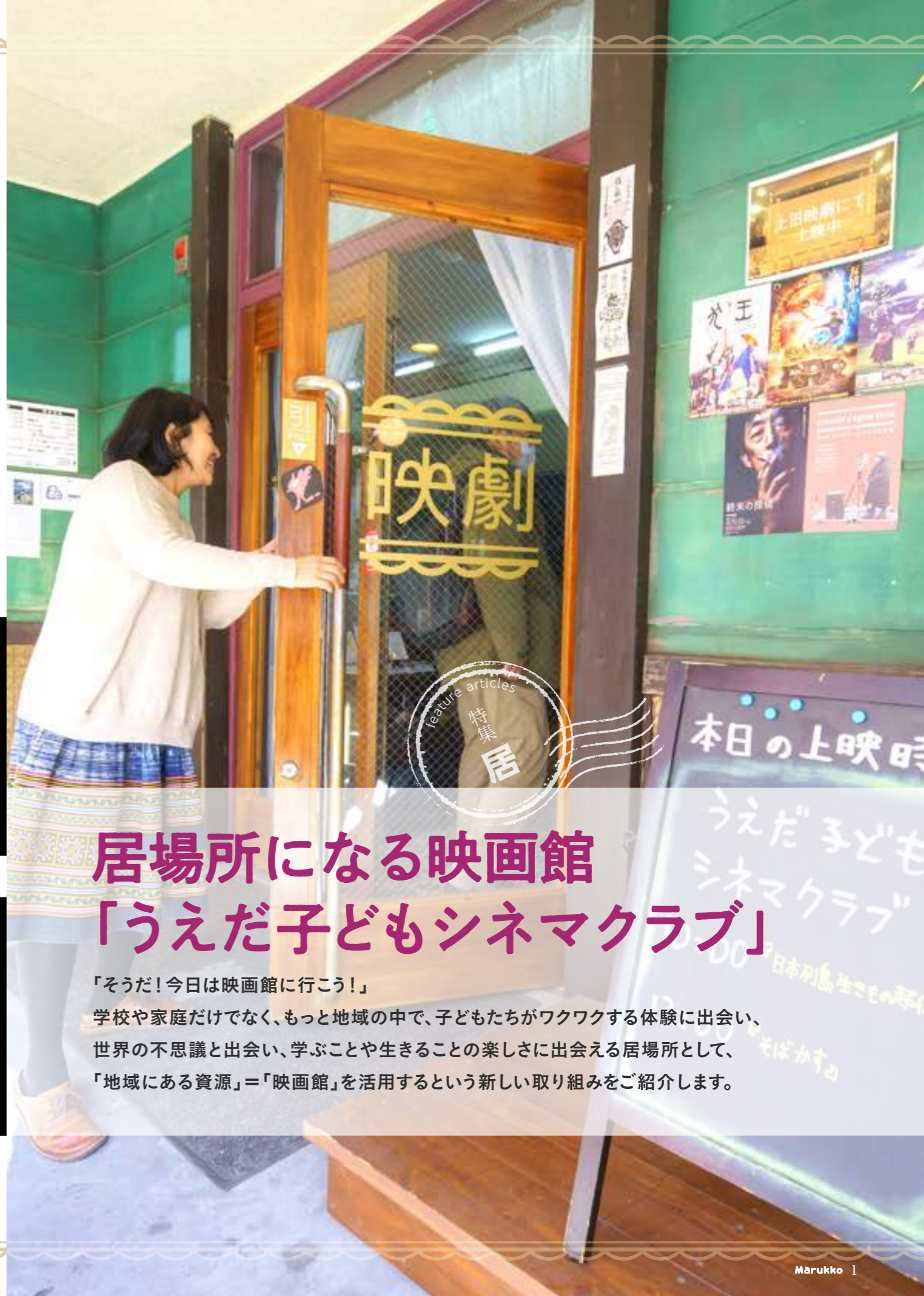
Marukko TOPICS



上田映劇の休館日に合わせて月2回開催。上田映劇スタッフがセレクトした選りすぐりの作品を午前と午後1本ずつ上映している。

あ
る月曜日の午前10時。さまざまな年代の子どもたちやその家族、不登校支援に関わる人などが続々と映画館に入っていく。学校に行きづらい日は、映画館に行こう——「うえだ子どもシネマクラブ」はいろんな理由で学校に行かない子どもたちのために月に2回開催されている全国でも珍しい取り組みだ。映画館の中での過ごし方に決まりはなく自由。映画をじっくり観る子、(映画館だけ)映画は観ずに併設のカフェでまったりする子、受付で大人と雑談する子、映画で怖いシーンがあると外に出てきて興奮気味にスタッフへ内容を解説し、ジュースを飲んでまた中に入っていく子。

それぞれが自分のペースで楽しんでる。ここではポップコーンやおにぎり、飲み物も無料で提供していて、映画館全体が子どもたちの「居場所」となっている。運営団体のひとつであるNPO法人アイダオの直井 恵さんは「学校の先生やソーシャルワーカー、心療内科医といった専門家じゃない立場の私たちだからこそ話してくれることもあるんです」と話す。
2020年に始まったこの取組は会員数が100名を超え、東御市や御代田町などの一部の学校ではここに来れば登校扱いとして認められている(2023年2月時点では上田市の学校ではまだ認められていない)。



feature articles
特集
居

居場所になる映画館 「うえだ子どもシネマクラブ」

「そうだ!今日は映画館に行こう!」
学校や家庭だけでなく、もっと地域の中で、子どもたちがワクワクする体験に出会い、世界の不思議と出会い、学ぶことや生きることの楽しさに出会える居場所として、「地域にある資源」=「映画館」を活用するという新しい取り組みをご紹介します。



校には行きづらくても、ちょっと映画館に行ってみない? と誘えば気軽に来やすいですし、映画はいろんな価値観や新しい自分に出会えて、学校では学べないこともたくさん詰まっているんですよ。」

そう直井さんが話すように、ある日の上映作品は『日本列島生きもの超伝説劇場版ダーク・ウィング』が来た! (2023年、久保嶋江実監督) またある日は『なまいきシャルロット』(1985年、クロード・ミレル監督)、『さかなのこ』(2022年、沖田修監督) などジャンルは問わず、感性や考え方を刺激する作品も多く上映する。


長野県の小・中学校における不登校児童生徒数は、2021年度は4,707人で前年比23.8%増、上田市では401名で21.9%増となり、全国的にも毎年最多を更新している(※)。学校に馴染み

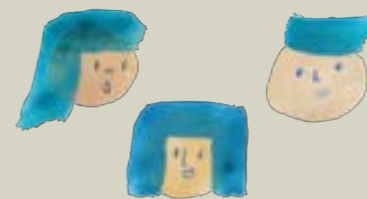
にくい個性を持った子どもたちにとって、家でも学校でもない第三の居場所が重要なことは間違いない。映画館の受付で時には友達のように子どもたちと話す直井さんは、みんなが生きやすい社会に向けて着実な一歩を重ねている。

※長野県教育委員会「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(令和3年度)」、上田市議会会議録「令和4年12月定例会(第4回)12月05日一般質問」02号より



「うえだ子どもシネマクラブ」に行ってみたい方は

- ① 「うえだ子どもシネマクラブ」に登録 
- ② 「うえだ子どもシネマクラブ手帳」が発行されます
- ③ 上映日に直接ご来場ください!
- ④ 上映日以外にも映画を観ていただけます(対象作品のみ)



会員登録フォームや上映内容など詳しくはHPをご確認ください

<https://uedakodomocinema.localinfo.jp/>



人の想いが人の幸せをつくりより良い居場所を作りあげる

学校に行かない子どもたちの場として映画館を提供する取り組みを行っている直井恵さんに、なぜこのような取組を始めたのか、お聞きしました。



上田高校海外交流アドバイザー、草の根文化芸術活動コーディネーター
特定非営利活動法人 アイダオ

直井 恵

「個の力」に気付いた フィリピンでの経験

大学院修了後、フィリピンで活動するNGOに数年所属しました。貧困地域で活動しましたが、食べる物に事欠く状況でも住んでいるお母さんたちは元氣一杯! すぐに「貧困地域の人々を助けよう、などと考えていたことがおこがましかった」と感じました。想像していた「支援」という概念が打ち砕かれたのです。潜在的な彼らの力を生かしたい、と発

想が180度変わりました。そのとき気付かされたことは、「国際協力とはお金だけではない」ということです。むしろ先進国の資金援助が彼らの暮らしや文化を変えてしまったり、尊厳を傷つけることも沢山ありました。電氣もガスも水道がなくても生きていける力があるのに、必要以上の資金援助はむしろその環境を壊していると感じたのです。たまたま私が大学院で学んだことが「開発教育」だったことも影響しているかもしれません。



フィリピンで活動されていた当時の直井さん

イルミネーションフォトコンテスト 2022 グランプリが決定!!

2月28日(火)まで実施していたウインターイルミネーション2022 丸子中央病院×上田女子短期大学「ローズファンタジーwithアニマルズ」のフォトコンテストグランプリが決定しました。審査員は、イルミネーションのデザインに携わった上田女子短期大学の学生たちです。バラの花と光のコントラストが美しく冬の幻想的な風景を思い浮かべることからこの作品が選ばれました。たくさんのご応募ありがとうございました。



グランプリ作品 ちよさん
フォトグラファー・ナーシングドゥーラ(産後ケア訪問看護師)

丸子中央病院 産前・産後ケア 2023年度 申し込みスタート!

「赤ちゃん教室」「ママの輪(オンライン)」(無料)の2023年度申し込みがスタートしました。

産前「赤ちゃん教室」・産後「ママの輪(オンライン)」の参加者を募集しています。

【赤ちゃん教室】

寝かしつけのコツ、抱っこ方法、スキンケアなど妊娠から小児科医が関わり赤ちゃんに関するお話をします。ハイブリット開催ですので現地参加でも、自宅からでもご参加いただけます。



【ママの輪オンライン】

赤ちゃんと一緒に参加ができる産後ケア講座です。お母さんの身体はホルモンや骨盤の筋肉の影響で産前とは変化しています。Zoomを使用したオンライン講座と一緒に体を動かしてみましょう。



職員募集中!
地域を支える
担い手になりませんか?



編集後記

子どもの居場所があればよい、というのが今回の特集の骨子です。でも、せっかく映画館での取り組みですので、おすすめ映画を直井さんにお聞きしたところ、「November」というエッセイ映画を挙げていただきました。動物も疫病も物も自然も対等に描かれていることが印象的だったとのこと。上映機会が少ない映画ですが、一期一会の映画に出会うのは大人にとってもワクワクする出来事です。たまにはミニシアターにお出かけはいかがでしょうか?



上田映劇は関東大震災被災前の帝国劇場と同じくりの格天井。上映前は天井を見上げ歴史を堪能できます。

●発行
特定医療法人 丸山会 丸子中央病院
経営企画課 広報係 Marukko(まるっこ)制作委員会
〒386-0405 長野県上田市中央丸子1771-1

●編集・進行
北澤 淳一(丸子中央病院)
安藤 あすか(丸子中央病院)
春日 真翔(丸子中央病院)

●アートディレクター
五木田 忠之(MOKUBA.CO.,LTD.)

●デザイン
MOKUBA.CO.,LTD.

●お問い合わせは…
丸子中央病院 経営企画課 広報係
Marukko(まるっこ)制作委員会まで
TEL.0268-42-1111
月曜日から金曜日、10時~17時(祝日・休日・年末年始を除く)

個性ある子どもが 生きづらい日本

フィリピンの貧困地域では精神的には元氣一杯の人が多かったですが、環境の劣悪な場所では擦り傷が化膿しただけでも治療ができず死んでしまうこともありま。その一方で日本の若者の死因の第1位は自殺ということを知ったときは衝撃的でした。生きたかったけれど助からなかった命と、生きられるのに生きることを諦めてしまう命。なぜそのようなことが起こるのか?

その理由の一つは「魅力あふれる個性のある子どもを認められない日本の社会」にあるのではないかと考えます。本音と個性と無駄が認められず、画一的な生き方、考え方を押しつけることを是とする日本の社会が、個性ある子の芽を摘んでしまっているのではないのでしょうか。

本当に学校に行かなくても良いのか?

私は「不登校」を問題だと思っていません。私の娘も学校に行きたがらない時期がありました。しかし、「楽しくない場所」に子どもが行かないのはとても自然なこと。まず学校が楽しい場所にならないと、幼稚園時代の園長先生におっしゃっていただき、ずっと肩の荷が降りました。私自身も「行きたくないときは、学校休んでいいよ」と多くの子どもたち



うえだ子どもシネマクラブの活動を始めてみると、「映画を観たい」との理由で長年家から一歩も出なかった子どもが外出した、というケースが数件おこりました。外の世界に魅力があれば一歩踏み出せる! という確信を持てた瞬間です。ただ、上映する映画によって来場する子どもの数に大きな差異が出ました。当然ですが、

観たい映画はそれぞれの子でも異なります。そこで上映する作品数を増やすことで多くの選択肢を提供することにしました。現在では月に2回、1度に2本ずつの映画を上映する場となっています。映画のお供や昼食としてコーヒーやポップコーン、おにぎりなどをふるまうことで、ほっとする雰囲気心がけています。それが功を奏してか、映画に興味がないにもかかわらず上田映劇に訪れてくれる子どももいます。

学校に行けないということがコンプレックスになり、「自分には力がない」と思わせられてしまっている子どもたちがいます。人には必ず潜在的な力がありますので、この場がそのことに気付いてもらえる契機に

モチベーションは「その」瞬間

なればいいですね。子どもが変わる瞬間に立ち会えるということに私は感動を覚えます。押し付けられてきた個性が、パン々と開花する瞬間が、私のモチベーションになっています。そんな子どもたちが成長して実際に詩集を出そうとしたり、個展を開いたり、私の想像を遙かに超える能力を発揮している姿を見るのはたまりません。

